

早稲田大学大学院日本語教育研究科  
修士論文

概要

参加者の「主体性」を生かす「日本語活動」とは何か

親子日本語サークル「にほんご あいあい」の  
実践から見えたこと

福村真紀子

2011年3月

## 第1章 序論

本研究は、参加者にとっての「日本語活動」の意味を考え、「日本語活動」の場づくりの在り方を実践者として考え、他の実践者にも提言するものである。ここで言う「日本語活動」とは、西口（2008）が述べている「地域日本語活動」とほぼ同義である。西口は、その活動が日本語習得に限定されるものではないことから、「地域日本語教育」あるいは「地域日本語学習支援」と呼ぶことを避けている。本研究で扱う対象も、「教育」あるいは「学習支援」のみを目的とする場ではなく、「地域」や「学校」という枠に限る必要もないことから「日本語活動」と呼ぶ。

本研究を始める前に、筆者は日本語を母語としない人、**Non Native Speaker**（以下、**NNS**）のPと知り合った。Pは2001年に来日し、次の年に出産した。来日して今年で9年になるが、今でも日本語でのコミュニケーションに困難を覚えている。特に子どもが保育園に上がる前は、日本語が話せないためにネットワークが築けず、孤独な子育てを強いられていた。Pには日本語の習得と子育て仲間が必要であったが、幼少の子どもを抱えるPを受け入れられる、子ども連れで参加できる日本語学習支援の場は周りになかった。

このようにPが置かれた状況から、幼少の子どもを持つNNSに開かれた日本語学習支援の場をもっと増やすべきだと考えた。これが本研究の1つ目の問題意識である。もっとも、「親子参加型」の日本語教室が存在しないわけではない。筆者は、そのいくつかを見学した。しかし、それらの教室の中には、その活動内容に違和感を覚えるものがあった。それは、母語話者、**Native Speaker**（以下、**NS**）のみが場をしきり、参加者の「主体性」を生かそうとする意識が見られなかったからである。日本語教室では、参加者の「主体性」を生かす活動をすべきではないだろうか。これが2つ目の問題意識である。

そこで、参加者の「主体性」を生かす「親子参加型」の日本語教室を、身近なところでつくろうと考えた。当時、筆者はA市国際交流協会が主催する日本語ボランティア教室に在籍しており、「親子参加型」の教室を新設することを提案した。しかし、資金面や保育・保険の面から新設は実現しなかった。それでもなお、自分の問題意識から、子ども連れで参加できる日本語学習支援の場の必要性を感じていた。そこで、自ら親子日本語サークル「にほんご あいあい」（以下、「あいあい」）を立ち上げ、参加者が主体的に参加できる活動をどうすればつくれるのかと考えた。これが本研究の動機となった。本研究の目的は以下のとおりである。

## 【目的】

参加者にとって「日本語活動」はどのような意味があるのかを明らかにし、「日本語活動の実践者はどのような場づくりを実践していくべきなのかを考える。

## 第2章

第2章では、先行研究と教室見学に対する検証をおこない、参加者の「主体性」とは何か、「参加者主体の場づくりとは何か」を考え、筆者が目指した「日本語活動」とは何かについて述べる。そして、実践研究を行う意義を現わす。

まず、①活動報告における「親子参加型」の日本語教室では、教室の実態を部分的に知ることはできるが、「参加者主体の場づくり」について示唆するものではない。次に、②先行研究における「親子参加型日本語教室」は、報告に留まるものがほとんどで、理論研究は少ない。その上、実践を通して「参加者主体の場づくり」を考察しているものはほとんどない。しかし、茂木・石原（2008）で述べられている「にほんごの会くれよん」（以下、「くれよん」）が主催する絵本の読み聞かせでは、参加者が主体的に社会に参加する姿勢が見られ、筆者にとって「参加者主体の場づくり」の参考となった。また、榎井（2009）も「とよなか おやこでにほんご」（以下、「おやこ」）の実践の事例をあげ、外国人にとって必要なことは日本語教師が日本語を教え込むことではなく、日本人との交流・情報交換であることを述べており、「あいあい」の場づくりへの刺激となった。そして、③先行研究における「地域日本語活動」では、筆者の「日本語活動」の概念づけの拠り所となった西口（2008）を検証した。ここでは、「おしゃべり日本語」という活動の理念が見られたが、具体的な実践が現れていないために場づくりの理論が明確には分からなかった。米勢（2006）は実践を通して「相互学習」という教室のあり方を示唆しているが、「相互学習」の具体が見えてこなかった。しかし、田中（1996）から、「相互学習」とは、偏った力関係が存在しない場所で、共同である活動をするために生まれるコミュニケーションを通じて、メンバー同士が学び合うことだと理解した。田中（1996）はそのような「相互学習」が起こる場所をコミュニケーションスペースと呼んでいる。さらに、西口（2004）は田中が提唱するコミュニケーションスペースに、共同作業にこだわらず、「言葉」を埋め込むことを提言している。筆者は西口の提言に共感した。

先行研究の検証に加え教室見学を行った。「くれよん」主催の「多言語絵本の会

RAINBOW」では、NNS・NS 参加者が共に絵本を多言語で子どもたちに読み聞かせる活動をしており、NNS が自文化の発信を生き生きとしている姿を見た。「おやこ」では、NNS が中心となる活動を企画に盛り込むなど、NNS・NS 参加者が共に活動の企画をしていた。これらの教室見学を通じて、筆者が目指す「日本語活動」とは何かが固まった。それは、参加者が場の中心となって主体的に参加できる「参加者主体の場づくり」であった。

そして、先行研究において「主体性」に視点を置いた「実践研究」が見られなかったことから、実際に筆者が自分自身の五感を使って「参加者主体の場づくり」を体験する「実践研究」が必要だと考えた。本研究は、細川（2005）で述べられた「実践」＝「研究」という理念の実現を目指す。

### 第3章

第3章では、本研究の実践フィールドである「あいあい」を立ち上げるまでのプロセスを現わす。次に、立ち上げ時のねらいについて述べる。「あいあい」の場づくりのねらいは、NNS・NS 参加者が共に活動を企画・運営するコラボレーション<sup>1</sup>を起こすことであった。その場づくりが、田中（1996）と西口（2004）が提唱した「コミュニケーションスペース」に相当するものだと考えたのである。また、コラボレーションをする中で、NNS は自分の提案や意見（あるいは反対意見）をコラボレーションの相手に伝えるために、日本語運用能力を高め、「日本語の学び」を起こしていくのではないかと想定した。そして、一緒に場を創り上げるという協働者同士が強い絆で結びつき、子育て仲間となることも期待した。立ち上げ時の筆者の考えでは、「参加者主体の場づくり」とコラボレーションが同義であり、コラボレーションが、参加者にとっての参加意義になるという考えであった。

しかし、実際に実践を始め、活動のねらいであるコラボレーションを起こすために、参加者に活動内容についての意見を何度か募ったが、積極的な意見出しはなかった。参加者は活動の企画・運営に携わることへは関心がないようであった。それでも、繰り返し「あいあい」に足を運び、「楽しかった」と言って帰る参加者が何人もいる。そこで、参加者が繰り返し「あいあい」に足を運ぶ理由について考え、参加者にとっての「あいあい」への参加意義は何か、参加者の「主体性」とは何か、というリサーチクエスションが立ち現わ

---

<sup>1</sup> 「コラボレーション」とは、「協働」が意味する「協力して働くこと」だけではなく、共に何かを創り上げるという「共同制作」の意味を含んでいる。

れたのである。参加者が自らの「主体性」を生かすことが参加意義だと捉えていたため、参加者の本当の参加意義が分かれば、参加者の「主体性」は何を意味するのかが見えると考えたのである。参加者にとっての参加意義と「主体性」を明らかにすることで、参加者が場に主体的に参加するとはどういうことか、「日本語活動」における「参加者主体の場づくり」とは何かが見えてくると考えた。

第3章では、本研究の研究方法についても述べる。本研究で扱うデータは（ア）毎回の活動記録、（イ）参加者による活動についての感想の記録、（ウ）参加者へのインタビューの3つである。調査協力者は4人である。4人のうちの3人がNNSのP、Q、Sであり、1人がNSのFである。データ分析の観点は、参加者はなぜ「あいあい」に来るのか、それはどのような背景事情が原因か、である。参加者の背景事情を探る理由は、八木（2006）が述べるように、研究者やボランティアが参加者を生活者と認識し、その上でかれら自身の声に耳を傾けることが重要であると意識したからである。本研究では、分析の観点をもとに、データからセグメント（データの切片）を抽出した。それらのセグメントにコードを付け、コードが似ているものをグループ化し、そのグループにカテゴリー名を付けた。分析で現れたコードの総数は48個、カテゴリーの総数は10個である。

## 第4章

分析の結果には、調査協力者ごとに、かれらが「あいあい」で見出した参加意義と、かれらにとっての「主体性」とは何かを現した。分析の結果見えたのは、それぞれの参加者がそれぞれの参加意義を見出しており、「主体性」の意味も参加者によって異なることであった。そして、それぞれの参加者が参加意義を見出す過程そのものが「主体性」を生かした活動であると考えた。本研究の分析結果の考察として重要な点は、参加意義と「主体性」に対する設計者と参加者の意識のズレの発見である。つまり、設計者である筆者は実践を立ち上げる際に「主体性を生かす場づくり=コラボレーション=参加者にとっての参加意義」と捉えていたが、実際には参加者それぞれが自分なりの参加意義を見出し、その参加意義を見出す過程で「主体性」を生かして活動していた。設計者が参加者にとっての参加意義を予め固定してしまうことで、設計者と参加者との間に、参加意義と「主体性」の捉え方のズレが生じてしまうのである。また、P、Q、S、3人のNNSに共通して言えることは、それぞれの参加意義を見出す過程で「日本語の学び」を起こしていたことである。

筆者は、コラボレーションの過程で意見交換をしたり共感、あるいは反発し合う中で NNS に「日本語の学び」が起こることを推測していたが、コラボレーションの過程でなくとも、自分なりの参加意義を見出す過程で「日本語の学び」を起こしていたのである。一方、「日本語の学び」を必要としない NS の F も「あいあい」への参加意義を見出していたことは、「あいあい」が NNS のみがメリットを得られる場ではないことを表している。

また、「日本語活動」は、調査協力者それぞれが参加意義を見出す過程で自分なりの「主体性」を生かしながら、「こうありたい自分」に近づいていく活動と言える。分析の結果として各調査協力者の参加意義を 3 つずつあげて説明したが、いずれも最後の参加意義が、かれらが行き着いた「こうありたい自分」の「こう」に近づくキーワードだと考える。そして、「あいあい」の活動は、NNS にとっては「日本で日本語を使って生活する私」はどのような「私」なのか、NS にとっては「日本で母語(日本語)を使って生活する私」はどのような「私」なのかを考えるきっかけとなったと思われる。つまり、「日本語活動」は日本語を通して他者と関わりながら「新しい私」に気づく場である。そのような場づくりも「日本語活動」のひとつの役割である。

## 第 5 章

本研究の目的は参加者にとって「日本語活動」はどのような意味があるのかを明らかにし、「日本語活動」の実践者はどのような場づくりを実践していくべきなのかを考えることである。そこで明らかになったことは以下のことである。

### 【結論】

参加者にとって「日本語活動」の意味とは、その活動に参加して他者と繋がる中で自分なりの参加意義を見出しながら「こうありたい自分」を確認していくことである。

そして、「日本語活動」の実践者は、参加者の参加意義を汲み取って理解し、活動に「日本語の学び」を埋め込みながら実践を更新していくべきである。

「日本語活動」は設計者が参加者の参加意義を汲み取って理解することと、参加者が自ら参加意義を見出していくことの繰り返しである。両者が影響し合って実践が更新され、場が継続されていく。どちらが欠けても実践の更新と場の継続はできない。設計者がすべ

きことは参加者にとっての参加意義を固定することではなく、参加者がどのような参加意義を場に見出しているのかを汲み取り、理解することである。そして、その参加意義を生かすべく実践を更新していくことである。設計者は、参加者が「なぜ自分はここにいるのか、ここで何が得られるのか、ここで得られたもので何ができるようになるのか」という参加意義を自由に見出せる実践に「日本語の学び」を埋め込んでいくことが求められる。

「日本語の学び」の埋め込みには、参加者が「伝えたいこと」を伝えるためにはどのような「伝える能力」が必要なのかを設計者が把握し、参加者が持っている能力に応じた活動をデザインし、そこで自信が得られればステップアップした活動を更新していくことが必要となるだろう。

本研究は、今後「日本語活動」の場づくりをする実践者へ向けて、参加者にとって「日本語活動」とは何かを示唆し、「参加者主体の場づくり」のひとつの提言ができたと考える。

#### 参考文献

- 榎井縁 (2009) 「地域における外国人子育て支援」『外来小児科』Vol. 12, No. 3, pp351-357
- 田中望 (1996) 「地域社会における日本語教育」『日本語教育・異文化間コミュニケーション—教室・ホームステイ・地域を結ぶ者—』凡人社
- 西口光一 (2004) 「『とよなかにほんご』に期待すること～スーパーバイザーの立場から～」  
『とよなかにほんごのあゆみ 1999～2003』(財) とよなか国際交流センター
- 西口光一 (2008) 「市民による日本語習得支援を考える」『日本語教育』138号, pp.24-32  
日本語教育学会
- 細川英雄 (2005) 「実践研究とは何か—『私はどのような教室を目指すのか』という問い—」『日本語教育』126号, pp.4-14
- 茂木真理・石原弘子 (2008) 「日本語支援から意味ある実践への拡張に向けて—地域に開かれた日本語教室活動—」WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』2008年度日本語教育実践研究フォーラム, 日本語教育学会研究集会
- 八木真奈美 (2006) 「定住外国人が日本語を使って生活する場で何が起きているか」2006年度日本語教育学会秋季大会予稿集
- 米勢治子 (2006) 「『地域日本語教室』の現状と相互学習の可能性—愛知県の活動を通して見えてきたこと—」『人間文化研究』第6号, 名古屋市立大学大学院人間文化研究科, pp.105-119